

ブダペスト通信

盛田 常夫



2024年 NO.2

2024年テニス全豪オープン観戦記

全豪オープンの男子決勝で、ビッグスリー（フェデラー、ナダル、ジョコヴィッチ）が登場しないのは19年振りだという。5年単位で世代を区分すると、ほぼ4世代にわたってビッグスリーが世界のテニス界に君臨するきわめて稀な時代が終わりを迎えたことになる。フェデラーはすでに引退し、ナダルの引退も間近いが、ジョコヴィッチにはまだ数年は世界のトップを争う力が残っている。難攻不落と思えるほどの強さを発揮してきたジョコヴィッチだが、準決勝で14歳下のスイナー（J. Sinner）*に完敗した。

*日本人はsee [si:] とshe [ʃi] の区別は無頓着である。少なくとも中学英語ではseeとsheの発声の違いを学ぶが、その後はこの区別を気にしなくなる。しかし、日本語でもスとシは別の発音である。「スシ（寿司）」と「シシ（獅子）」はまったく異なる発声で意味も異なる。日本語でこの発声が曖昧だと笑い者にされるが、なぜか英語になるとこの区別が忘れられる。スとシを区別できなければ意味不明になるのは、日本語も英語も同じである。

2024年1月30日

その結果、航空機のアナウンスでも、「シートベルトをお締めください」となる。シートベルト (sheet belt) は紙のベルトである。スチュワーデスによってはきちんと「スイートベルト」と発声している人もいるが、日本語では「sheet belt」がほとんどである。

人の名前を間違っ発声されて気分が良いはずがない。シナーと発声しても、欧米では誰も Sinner とは思わない。日本語でも区別される音を、なぜか欧米語では曖昧にする日本人の発声音痴には困ったものだ。

決勝戦は次代のテニス界を担う二人の闘いになった。メドヴェージェフはいわゆるツイッパス (父パスではない) 世代のトップで、スイナーはアルカラスに代表される 20 歳前後の若い世代の代表の一人である。この決勝戦は男子テニス界がビッグスリーの時代から第 4 世代の時代へと移りつつあることを象徴する試合になった。

事前の予想では、苦戦が続いたメドヴェージェフの疲労を考えれば、6 時間ほど試合時間が少ないスイナーが有利と見るのが大勢だった。とくに準々決勝と準決勝で、メドヴェージェフは 8 時間もの時間を使っている。この疲労が勝敗を分けるだろうと考えていた。メドヴェージェフに勝機があるとすれば、経験値の違いである。

ところが、ふたを開けると、メドヴェージェフは出だしからパワー全開で、ミスの少ない試合を展開した。これだけの疲労を抱えながら、最高のゲームを展開できるスタミナと体の強さに驚くばかりである。実際、メドヴェージェフの戦略は長期戦を避け、蓄積された疲労が出ないうちに短期決戦で勝負を付けるプランだった。この攻撃的なテニスにスイナーはやや気後れし、ストロークで先にミスをする展開が続いた。90 分も経たないうちに 2 セットを簡単に失ってしまった。ここまではメドヴェージェフのプラン通りである。

スイナーが互角の展開に持ち込んだのが、第 3 セット中盤からである。ここから、形勢がわずかにスイナーに移った。中盤以降、勝負所でメドヴェージェフのミスができるようになり、他方でスイナーはこれまでミスを重ねた勝負球が決まり出した。このわずかな違いが第 3 セットの勝敗を分けた。そして、これで試合の潮目が変わった。

第 4 セットに入ってから、メドヴェージェフにストロークミスが多くなり、他方でスイナーの勝負球がウィナーになる場面が増えた。明らかに、90 分を過ぎてから、メドヴェージェフの攻撃的なテニスが影を潜めた。第 3 セットと同じような展開で

第 4 セットを失ったメドヴェージェフは、スィナーの勢いに押される形になった。こうなると、疲労度の少ない若いスィナーが優位に立つ。しかし、若い選手は経験のある選手に足元をすくわれるリスクがある。そのリスクを抑えながら、メドヴェージェフのミスの助けもあって、マッチポイントをしっかり決めることができた。スィナーのメンタルの強さを褒めたい。

一方、決勝を終え、全 7 試合で 25 時間ほどのゲーム時間を費やしたメドヴェージェフのスタミナや勝負強さには、改めて感心した。2m 近い長身ながら、ドロップショットに食いついて返球する粘り強さにも驚いた。これほどの大柄な選手が前後左右に縦横無尽に走り、強打を打つテニスを見ると、フィジカルが弱い日本人選手にとって、世界のトップは遠くなるばかりだと実感させられる。

錦織世代とツイツイパス世代

ビッグスリーのすぐ下の世代はチリッチ、ラオニッチ、錦織、ディミトロフと続くが、チリッチが錦織を破って優勝した 2014 年の全米オープン以外に、この世代の選手はグランドスラムで優勝できなかった。2014 年から 2015 年にかけて、錦織は Nadal やジョコヴィッチと互角の試合を展開したが、そこからビッグスリーとの差が一挙に広がった。その主要な原因は体の強さにある。Nadal やジョコヴィッチが強い体を作り、サーブ力を向上させたのにたいし、錦織は怪我が多く、サーブ力を上げることができなかった。ジョコヴィッチは剛球サーヴァーのイヴァニセヴィッチをコーチ陣に入れサーブ力を磨き、ストローク力だけでなく、サーブ力もトップクラスの力を維持している。これにたいして、錦織は日本人コーチからサービスフォームが怪我の原因だと指摘されフォームの調整を行ったが、何のことはない実戦に復帰してすぐにまた腕を痛めてしまった。フォームではなく、肩や上腕の弱さに問題があることを指摘し、鍛えてくれるコーチに巡り合えなかったことが、ビッグスリーとの分かれ道になった。

錦織世代に続くのが、ティーム、ツイツイパス、ズヴェレフ、メドヴェージェフである。これら 4 名は皆グランドスラム大会の決勝に進み、メドヴェージェフは 2021 年の全米オープンで優勝した。3 名のうちでもっともフォームが醜いメドヴェージェフが、持ち前のパワーと粘りでこの世代のトップに立ったが、台頭したての頃は評価が低かった。フェデラーもメドヴェージェフを過小評価したことを述懐しているが、フォームの綺麗さより、パワーとボールへの執念が勝負を決めることを教

えている。逆に、フェデラーと同じ片手バックハンドのツイツイパスはもっとも有望視されていたが、パワーテニスの時代に片手のバックハンドでは力負けすることがはっきりした。ツイツイパスが勝ちきれない原因である。他方、ズヴェレフは恵まれた体から繰り出される剛球サーブやストロークで相手を圧倒する力を持ちながら、肝心の場面で積極性が欠如するメンタルの弱さが露呈する。勝負所で勝ちきれない弱点がある。ティームは 2020 年の全米オープンでズヴェレフを破って優勝したが、その後は怪我で精彩を欠いている。

ツイツイパス世代がビッグスリーに勝ちきれない間に、その下の世代が台頭してきた。アルカラス (21 歳) とスィナー (22 歳) であり、彼らに続くルーネ (20 歳) である。ルーネはまだ粗削りだが、アルカラスとスィナーはすでにグランドスラム大会を制し、これからのテニス界を背負う選手である。

時代はパワーテニス

ここ 5-6 年、2m 近い長身でパワーがある選手が台頭している。それまで 2m を超える選手 (カルロヴィチ、イズナー、オペルカなど) はサーブ力があっても、体が大きすぎて動きが鈍く、ストローク戦に耐えることができなかった。ところが、ツイツイパス世代は皆 190cm 以上の背丈でパワーがありながら、足も速く、ストロークも粘り強い。このような選手が台頭してくると、フィジカルが弱い小柄な選手は相手にならない。アルカラスは身長こそ 180cm をわずかに超えるが、太ももが太く、腕の筋肉は盛り上がっている。この身体的な強さと俊敏な動きが、彼の強さを支えている。スィナーもルーネも 190cm に近い身長と優れた運動神経をもつフィジカルが強い選手である。

これにたいして、日本人選手は線が細い。2019 年のウィンブルドンのジュニアを制した望月慎太郎選手は長身とは言えない 175cm の背丈で、脚も腕も細い華奢な体つきである。ボールを返す技術は高いが、如何せんパワーが不足している。もう 10kg ほどウエイトを増し、筋肉を付けてパワーアップしないと、世界ランキング 50 位以内に入るのは難しい。

それに比べて、今年全豪ジュニアを制した坂本怜選手は 17 歳ながら、すでに身長は 190cm を超える。決勝戦 (<https://www.youtube.com/watch?v=8KR9tBPQqkA>) のデータを見る限り、ファーストサーブは最速 210km/h、平均 195km/h を記録しており、スィナーやメドヴェージェフのデータと遜色ない。決勝の相手のチェコ選手は坂本

選手よりわずかに大きく、25本のサーブミスエースを決めたが、それでも試合を押し切ることができた坂本選手のディフェンス力はたいしたものである。まだ体が出来上がっていないが、これから筋肉をつけて行けば、これまでの日本選手にないパワーテニスの選手になるだろう。アルカラスやスィナーに次ぐ次世代を担う選手になれる素材である。テニス界の大谷翔平になれるように、これからの坂本選手の成長に期待したい。優れたフィジカルコーチを付けることが成長のカギである。

一つだけ付け言わせてもらえば、せっかくフロリダにテニス留学しているのだから、優勝者スピーチは最後まできちんと英語でしゃべってもらいたかった。メドヴェージェフは英語だけでなく、フランス語でもスピーチできる語学力をもつインテリである。その語学力が、たびたび痲痺を起こして評価を下げてきたメドヴェージェフの評価を上げる要因にもなっている。これから国際舞台で活躍する坂本選手には、語学でも精進を期待したい。

また、車いすテニスの部でも、17歳の小田凱人選手が全豪オープンで優勝した。車いすテニスの世界をリードするのは皆年配の選手で、若くてパワーのある小田選手が車いすテニス界の頂点に立ち、国枝選手の記録を塗り替える活躍をするのは確実だろう。小田選手の息の長い活躍にも期待したい。

女子もパワーテニスの時代

女子の決勝戦はパワーの違いがはっきりしていて、勝負にならなかった。180cmを超える身長と80kg近いウエイトをもつサバレンカは、どんなボールも全力で打つ。少し前までは粗削りな強引さが災いして、なかなかグランドスラムの栄冠を手にすることができなかった。ところが、ここ1年のサバレンカは全力でボールを叩いても、簡単なミスをしなくなった。それが好調さを支えている。相手の鄭欽文は長身の選手で、それなりのサーブ力はあるが、サバレンカのパワーに押されて、勝負にならなかった。

サバレンカのパワーに対抗できる女子選手はそれほどいない。大坂なおみ、ガウフ、シオンテックなどは拮抗したゲームを展開できるが、それ以外の選手ではちょっと太刀打ちできない。ただ、女子でも19歳のノスコヴァがシオンテックを破ったように、パワーのある若い選手が台頭している。

少し前までは大坂選手のように、190km/hの剛球サーブを打てる女子選手は数えるほどしかいなかったが、今ではかなりの選手が180km/hを超えるサーブを打っている。こうなると、大坂選手もサーブ力だけでは勝ちきれない。ディフェンス力やフットワークで相手を上回ることができなければ、簡単にトーナメント勝ちあがることは難しい。

大坂選手以外の日本人女子選手は160cm前後の小柄な選手が多く、とても世界のトップとパワーで勝負ができない。だから、グランドスラム大会の1回戦、いやそれ以前の予選を勝ち抜くことすら難しくなっている。今大会の1回戦で日比野選手はサッカリ選手と対戦した。サッカリ選手は173cmの小柄ながら、パワーがある選手として知られている。日比野選手はハイボール戦術で戦った。相手の強打を振り切らずに当てるだけで、高くボールを返す戦術である。この戦術はある程度まで機能するが、これで勝ちきることはできない。

男女とも、日本選手は1回戦で姿を消した。パワーテニスの時代に、打法のフォームを重視するコーチングには限界がある。パワーとフィジカルな強さを高めるトレーニングは不可欠である。身体能力が高い選手の台頭を期待したい。